

第百一話 日独伊三国同盟は、いとも簡単に締結された？

日独伊三国同盟（1940/9/27 調印）締結に至る過程で、枢軸派には松岡外相、大島駐独大使（陸軍出身）、白鳥駐伊大使等、民間では徳富蘇峰、中野正剛、久原房之介、海軍では末次信正の各氏が居るものの、それだけで三国同盟に踏み切ったとも思えない。世論に後押しされ、或いは迎合しての面もあるだろう。そういう中でも陸軍が強力に推進した結果が三国同盟締結であると考えられているようだ。が、実態は少し違うとの論もある。陸軍は消極的だったというのである。

陸軍の関心事項は、対ソ軍備の充実であり、支那事変の解決である。張鼓峰事件やノモンハンの局地戦でソ連軍の戦力を痛感した陸軍は、対ソ戦備が整うまでは事を構える気はなかった。独との提携は対ソ牽制であり、当面北方静謐が狙いであった。独との同盟締結に当たって陸軍は、同盟の対象国としてソ連のみを考えていたが、対ソ限定では独も伊も乗ってこないで、英仏をも対象国に加えた。



対ソ戦の前に支那事変を解決する必要もあり、日独伊が連携することにより、援蔣諸国を牽制して対日戦勝利を断念させることが目的として考えられた。

また、この時期、独外相リッペンドロップの腹案と云われるものがあり、日本はこの腹案に則り、日独伊ソの四ヶ国の同盟を実現して、国際的地位の向上を図り、対米交渉を有利にしたいと考えた。

日ソ中立条約（1941/4/25）や独ソ不可侵条約（1939/8/23）もこの文脈で理解すれば容易である。独にとっては東の脅威を、日本にとっては北の脅威を極小化しようとしたのである。

勿論、三国同盟はその条文にある通り、世界新秩序建設のための血盟という意義はあるのだが、陸軍の考えをなぞってみると積極的に三国同盟を推進したいとの熱意が余り見られない。首陸海外の四相会議（1940/9/6）で、松岡外相から三国同盟を持ち出された陸軍（東条陸相）も海軍（及川海相）も初耳であった由である。幕僚レベルからトップに話が通っていなかった。東条陸相は直ちに同意し、及川海相は内心反対であったにも拘らず原則同意したとされる。斯様に松岡外相の主導によって電撃的に三国同盟締結へと歴史は急展開したのである。

人種差別主義者であるヒットラーは、心ならずも、日独提携により、米国を欧州面に戦闘加入させるのではなく、日本により、米軍を太平洋正面に拘束することを期待していたのだろう。

斯様に色々な思惑が交錯する中で、近衛首相は三国同盟締結を決意するのである。近衛首相は海軍が反対すると思ったとしているが、枢軸派に背中を押されての決断だったのである。時の及川海相は原則同意したという。内心は反対であるが、国際世論や情勢上それを強く主張し得ない雰囲気があった？

ターニングポイントの一つとも云われる三国同盟締結だが、何とも歯痒い気がする。消極的な陸軍、内心反対の海軍、一部狂信的な枢軸派の蠢動が作用して、しかも電撃的な締結となったような気がする。陸軍の中枢部に枢軸派が居たことは事実だとしても重大な国策決定が、いとも簡単に決められたようだ。内心反対だが、反対しにくかったとか、海軍が反対すると思っていたなどの言が出るのは日本的なのだろうか？

攻守同盟を締結するには、目的の確立と確固たる見通しが必要だが、それが曖昧模糊としている。抑々、三国同盟は軍事同盟なのか？陸軍にとっては、政治的な連携策以上ではなかったような気がする。

（第百一話 了）